

〔研究ノート〕

非同期型動画交換を軸としたクラス間異文化交流

—より良い活動設計を目指して—

山内 真理

1. はじめに

外国語運用力は「上達してから使う」のではなく「自由に操れない段階でその言語を使わないと上達しない」(八島, 2004: 30)。しかし, 現状, 学校教育における英語での産出活動は不足している。2017年告示の学習指導要領改訂の際も, 「授業では依然として, 文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ」ており, 「特に, 『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が適切に行われていない」との指摘がなされている⁽¹⁾。少なくとも現時点では, 英語の使用経験が不十分なために上達できないままきってしまった大学生が多いと考えられる⁽²⁾。そのような学習者は一般に, 英語の音声連続を生成・知覚する訓練も不足しており⁽³⁾, 日本語の音声処理システムを流用するしかないため⁽⁴⁾, 発音も聞きとりも非常に苦手である⁽⁵⁾。

彼らは上達するには使う必要があると分かっているが, 使う機会が目の前にあっても, 進んでその機会を利用しようとはしない⁽⁶⁾。自由に操れない言語でのコミュニケーションはそもそも「外国語不安」を引き起こしやすい状況であるが⁽⁷⁾, 長いこと上達を感じていないために英語に対する自信もなく, それが外国語不安を強める要因にもなる。不安の高さ・自信の低さから「使う」機会を利用しないため, 上達も望めない。不安や自信も改善しないため, 「使う」機会からも遠ざかったままになる。

(1) ただし, 2008年の改訂後改善が見られてはいる。文部科学省(2017)を参照。

(2) 学習者によっては, 自由度の高くない, 語彙や構文の定着のための産出活動経験すら著しく不足している(山内, 2017)。

(3) 習熟度の低い英語学習者の場合, 単語学習のレベルですら綴りと意味を結びつけるだけで, 音声との結びつきは後回しにしたり全く意識していないことが多い。

(4) 山内(2002), Greer & Yamauchi(2008)では, 短文レベルでの聞き取りの誤答を分析し, 日本語専用の音声処理システムを英語音声の知覚に流用していることが様々なタイプの聞き間違いを引き起こしている可能性を示唆した。日英では, 中森(2006)も指摘するように, 母語システムの流用(母語同一化音声処理)の弊害が大きいため, 学習の初期から, 母語からの影響を受けない「外国語専用の音声処理システム」を築くための練習・訓練が必要なのだが, この初期の訓練が不足しているのが現状である。

(5) 短文レベルで音素・単語・チャンクを識別することが困難であり, 音声刺激と意味とのマッチングができない。できたとしても時間と労力がかかりすぎるため, より大きな範囲の意味内容を統合したり, それについて自分の考えをまとめたりといった他の操作がリソース不足のために遂行できない。

(6) 本学のInternational Squareの利用に及び腰になる学生を思い浮かべてほしい。

(7) 「聞き取れなかったら困る」「通じなかったらどうしよう」「間違ったら恥ずかしい」といった, 外国語使用場面に結びついた不安を「外国語不安」と呼ぶ。八島(2004), 八島(2019)を参照。

学習者がこの膠着状態から抜け出す手助けとして、外国語不安の軽減に配慮した、適度にチャレンジングな英語使用課題を与え、強制的に取り組んでもらうことが必要になる。自信のなさを解消するには、実際にそれを経験して「できた」「大丈夫だった」と実感するしかないからだ。本稿で報告する「動画交換を軸とするクラス間言語文化交流」は、日本側に関しては、そのような英語使用課題として設計したプロジェクトである。

以下では、どのようなサポートを意図して活動が設計されたかを論じた上で、2018年度の実践結果を報告する。このサポートが機能し、参加者が有意義かつ肯定的な英語使用経験をもてたかどうか、主要な関心事の一つである。また、今回の実践において、改善すべき課題も明らかになったことからこれらを整理して次の実践につなげたいと考える。

2. 2018年度交流概要

本交流プロジェクトは、CEFRのA1～A2レベルの学習者にとっても有意義な学習経験となりうる異文化交流プロジェクトとして計画された(表1を参照)。パイロット的に

表1 CEFRレベルの全体的な尺度⁽⁸⁾

熟達した言語使用者	C2	<ul style="list-style-type: none"> ● 聞いたり読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。 ● いろいろな話し言葉、書き言葉から得た情報まとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。 ● 自然に流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
	C1	<ul style="list-style-type: none"> ● いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。 ● 言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。 ● 社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。 ● 複雑な話題について明確でしっかりとした構成の詳細にテキストを作ることができる。
自立した言語使用者	B2	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的・具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。 ● お互いに緊張しないで母語話者とやり取りが出来るくらい流暢かつ自然である。 ● かなり広範な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、様々な選択肢について長所や短所を示しながら自己の観点を説明できる。
	B1	<ul style="list-style-type: none"> ● 仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について標準的な話し方であれば主要点を理解できる。 ● その言語が話されている地域を旅行している時に起こりそうなたいていの事態に対処することができる。 ● 身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。 ● 経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	<ul style="list-style-type: none"> ● ごく基本的な個人情報情報、買い物、近所、仕事など直接的関係がある領域に関するよく使われる分野の表現が理解できる。 ● 簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。 ● 自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で表現できる。
	A1	<ul style="list-style-type: none"> ● 具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。 ● 自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。 ● もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

実施した2017年度の交流プロジェクトからの知見（山内，2018）を生かして改良されたプロジェクトである。以下では，特に日本サイドに注目して，本交流プロジェクトの概要と活動設計の意図を論じる。

2.1 参加者

2018年度の交流プロジェクトの参加者は，日本の「異文化コミュニケーション」クラス（ゼミナール）で学ぶ大学生15名と，アメリカの日本語会話クラスで学ぶ大学生7名であった⁽⁹⁾。双方とも日常生活で目標言語を使用する機会は乏しい。ただし，日本側ではキャンパスやアルバイト先などで英語を使う機会は利用可能ではあった。

参加者の目標言語の運用能力は，日米とも，留学経験のある学生数名を除いてほぼ初級から中級程度であった。日本側では簡易的な診断テストを実施しており⁽¹⁰⁾，その結果，CEFRのB2，B1と判定されたのが各1名，A2が3名，A1が1名，残りはA1-A2レベルと判定された。文法問題5題（50点），会話・表現問題5題（50点），リスニング問題5題（50点）の計15問から成る簡易テストではあるが，参加者間の英語習熟度の差は比較的よく反映されていたと思われる。

2.2 交流プロジェクトの位置付けと目標

本交流プロジェクトは，日本側では「異文化コミュニケーション」ゼミナールの後期授業の中心となる活動であった。これに先立ち，前期にはコロンビアとのテキストベースの異文化交流を中心として，コミュニケーションにおける自己開示，マインドマップを用いた言語化，文化類型，コロンビアと日本の比較などについて学んでいた。後期になって，前期の学びを活かしつつ，アメリカの大学生をパートナーとする交流に取り組み，動画利用という新しい要素に挑戦した形である⁽¹¹⁾。交流プロジェクト終了後は，フォローアップ課題（リスニング）と最終課題（リフレクション）に取り組んだ。

この交流プロジェクトを通して，(i) 自他文化の差異や類似性を説明できるようになること，そして(ii) 英語をコミュニケーション手段の一つとみなし，利用可能な手段を駆使して伝えようとする態度を身につけることが，日本側の参加者たちにとっての目標である。目標(i)は課題のトピックとタスクに反映されている（2.3を参照）。目標(ii)に向けて，動画作成課題と，動画についてのコメントのやりとりに取り組むことになる。この取り組みへの積極的な参加をいかにサポートするかが，この実践での研究課題であった。

2.3 トピック・タスク・期間

本プロジェクトは，2018年の10月から12月の約10週間にわたって実施された。この

(8) 吉島・大橋他 訳・編（2004）を参照して作成した。

(9) プロジェクト開始時点では日本側は17名，アメリカ側は9名だったが，受講取り消ししないし休退学のため，それぞれ2名減った。

(10) 「NHK 英語力測定テスト2018」を利用した。

(11) アメリカとの交流と同時並行で，前期に引き続き，コロンビアとのテキストベースの交流も行っていた。したがって，この時期，彼らが英語に触れた時間はかなり多くなったと思われる。

期間で扱ったトピックは表2に示した4つである。指定されたトピックについて、動画を作成・投稿し、その動画についてテキストベースでやりとりを行うところまでで1ユニットになる。

表2 交流活動のユニット

ユニット	トピック (動画タイプ)	トピック継続期間
1	自己紹介 (グループ動画)	第1～第2週
2	自分の国の興味深いこと (グループ動画)	第3～第5週
3	相手の国の興味深いこと (グループ動画)	第6～第9週
4	パートナーから学んだこと：国・文化・言語 (個人動画)	第10週～

動画作成はグループ作業を基本とし、下調べ、スクリプト準備、撮影、編集などの作業を、グループごとのやり方で授業内外の時間を使って行った。授業時間は、随時、全体でのブレインストーミングやパートナー動画の視聴、また各自でのコメント作成等に使った。

1ユニットに最低2週間かけることとし、授業時間が取れない週（アメリカのテストや感謝祭休暇、日本の学祭休みなど）は「やり取り」期間を長めに取るなどの調整を加えて、10週間でカバーする計画であった。が、実際は休講期間に活動が滞ったことから、次のユニットに進むタイミングを遅らせることになり、最後のユニットは動画投稿までで時間切れとなった。最後の動画は振り返りを兼ねた個人課題としたが、動画での振り返りについてやりとりを行う時間が取れなかったのが残念である。

2.4 参加促進のための5つのサポート

前述した通り、日本側の参加者たちにとっての目標は、このプロジェクトを通して、(i) 自他文化の差異や類似性を説明できるようになることと (ii) 英語をコミュニケーション手段の一つとみなし、利用可能な手段を駆使して伝えようとする態度を身につけることであった。これらの目標を目指して、英語の習熟度が低く外国語不安を感じやすい学習者も、積極的にやりとりに参加して産出・表現活動を行えるよう、以下①～⑤のような様々なサポートを意図して活動設計を行った。

① 動画の伝達力

動画を利用することにしたのは、動画のもつ強力な情報伝達力（表情、感情、仕草、その場の光景や動きなども同時に伝達可能）が、目標言語での理解と表現の双方を助けると期待されたからである。また、参加者が臨場感や親近感をいだきやすく、やりとりの相手や内容に対する興味・関心も高まりやすいことも、参加促進につながると考えた。

② 非同期型コミュニケーション

非同期型コミュニケーションでは受信・発信に必要な時間をかけられるため、同期型コミュニケーションにはついていけない参加者でも、理解や表現活動が可能になる。また、時間的制約からくるプレッシャーもないため、同期型コミュニケーションに比べて緊張感

や不安感も起こりにくい。①で述べた動画の伝達力は、同期型のビデオ通話にも当てはまるが、本プロジェクトでは交流相手国との時差のため、同期型コミュニケーションを選択する余地はそもそもなかった。時差に関わらず実施できるのも非同期型のメリットであるが、仮に同期型が可能だったとしても、参加者の英語習熟度等を考慮すれば、今回の参加者のほとんどにとっては、非同期型コミュニケーションの方が適切だったと考える。

③ グループでの動画作成

非同期型コミュニケーションは、同期型に比べると外国語不安を引き起こしにくいのだが、本実践の要となる動画撮影については、「自分が話すところを撮影する」ことに対する抵抗感が予想された。撮影時の「不安」を緩和するために、動画作成をグループ作業にすることにした。また、グループでの動画作成では、取り上げた題材をどう表現するか（話し方、見せ方）の点で創意工夫が起こりやすく（山内, 2018）、参加者が英語力以外の面でも貢献できるという点もメリットだと考えた。

④ 二言語使用

日本語と英語の二言語使用は、交流に「言語交換」の要素を組み込むことを意図したものである。2017年度の実践では、動画における二言語使用は参加者の裁量に任せた部分が大きかったが、目標言語のみでの理解が難しい学習者でも、日本語版で内容を理解した上で英語版の視聴に挑戦できるという利点が観察された（山内, 2018）。また、動画に続くやりとりでは、理解した内容についての反応を目標言語（+母語）で表現していくことになり、意味のあるコミュニケーションの中で未熟な外国語を使う経験を積む格好の機会ともなる。

そこで2018年度は、参加促進を狙って二言語使用を課題に組み込むこととした。動画では、まず目標言語で話し、次に母語で話すよう指示した。それに続くスレッドでは、コメントでの会話を続けることを重視し、可能なら二言語を使うこととした（図1を参照）。

⑤ 少人数グループ編成

少人数グループ編成は、オンラインでのやりとりを、より参加しやすいものにするために取り入れた。2018年度は、日本側3～5名、アメリカ側1～2名からなる小人数グループを4つ作り（図2）⁽¹²⁾、その小グループ内でのやりとりを必須とした。1つのグループ（日米計5～7名）は、1ユニット（最短2週）につき、図1にあげたようなスレッド2つ分のやりとりを行ったことになる。小人数のグループに分けることで、同じ時期にアップされる投稿が多すぎて対応できない、といった事態を防ぎやすいと考えた。

必須の交流相手が少人数になることで、やりとりを「他人事」とみなしにくくなり、個人同士の関係が築きやすくなることも期待した。また、グループ内のスレッドだけなら、やりとりが活発になっても迷子になりにくいという利点もある⁽¹³⁾。参加促進を狙って少

(12) 当初は日本4-5名（計17名）、アメリカ2-3名（計9名）だったが、途中で2名ずつ抜けたためこの数字になった。日本側は5名グループから抜けたメンバーがいなかったため、人数バランスを取るための再編成も検討したが、各グループの特色が出てきていたこともあり再編成はしないことにした。



図1 日本側の動画とそれに続くスレッド



図2 日米混合4グループ (2018年度)

人数グループ編成をとったが、Facebook Group (2.5を参照) に投稿された動画は当然誰でも視聴可能であり、他のグループへの反応も推奨した。

以上、本プロジェクトにおける動画交換について、①動画の伝達力、②非同期型コミュ

ニケーション, ③グループでの動画作成, ④二言語利用, ⑤少人数グループ編成という5つの特徴が, 異文化間でのやりとりへの積極的な参加をどのようにサポートしうるか, 説明した。ここで想定したサポート効果は, 表3のように整理できる。

表3 動画交換における参加促進

	外国語不安の軽減	表現のサポート	理解のサポート	関係づくりのサポート	FBでのやりとりのサポート
① 動画の伝達力		✓	✓	✓	
	<ul style="list-style-type: none"> ・言語的には未熟でも興味深いメッセージを発信することができる。 ・言語的に理解できる以上のメッセージを受け取ることができる。 ・話しかけてくる人の顔が見えるので, 親近感をいだきやすい。 				
② 非同期型コミュニケーション	✓	✓	✓		
	<ul style="list-style-type: none"> ・時間的な制約からくる「不安」が起こりにくい。 ・話したり書いたりする前に, 調べ, 考え, 練習できる。 ・理解できない部分は調べたり, 繰り返し再生したりできる。 				
③ グループでの動画作成	✓	✓			
	<ul style="list-style-type: none"> ・話すこと, それを撮影することに対する「不安」が軽減できる。 ・どう表現するか, アイディアを出し合って創意工夫ができる。 				
④ 二言語利用	✓	✓	✓		
	<ul style="list-style-type: none"> ・「理解できなかったら」という「不安」が軽減される。 ・英語だけでは表現しきれなくても日本語では表現できる。 ・英語だけでは理解しきれなくても日本語と照合すれば理解が進む。 				
⑤ 日米混合小人数グループ				✓	✓
	<ul style="list-style-type: none"> ・大きなグループより, スレッドのやりとりに参加しやすい。 ・大人数より互いに親近感を抱きやすい。 				

2.5 Facebook Group の利用

本プロジェクトでは, プラットフォームとして Facebook Group (Closed に設定) を採用した (図1, 図2, 図3)。ここでは, この選択について説明しておく。

まず, 動画交換を軸としているため, スマートフォン用のアプリがあり, 動画撮影および共有, そしてその後のやりとりが非常に容易に行える点大きい。第二に, これと関連して, 教員個人が動画管理のスペースを気にする必要がない。第三に, Facebook の Closed Group に投稿された動画は, この交流用 Group の外で再共有することができず, また投稿した本人しかダウンロードできないため, 不用意に拡散されてしまうことがない。第四に, もともとコミュニケーション用のツールであることから, 新規投稿や返信があった際の通知など, やりとりを促進する仕組みも十分である (山内, 2018)。

最後に, Group Topics 機能を使ってタグづけができるようになったのも大きい。2018

(13) 1 ユニットあたり合計 8 件のスレッドが同時並行で動くことになるため, 以前であれば「迷子」問題は残っただろうが, 後述する Group Topics 機能が導入されたことで, この問題は解消された。Group Topics 機能については 2.5 を参照。

年度のプロジェクトでは、4つのトピックと4つの小グループのタグを用意することで(図3)、目指す投稿を見つけることが非常に容易になった。

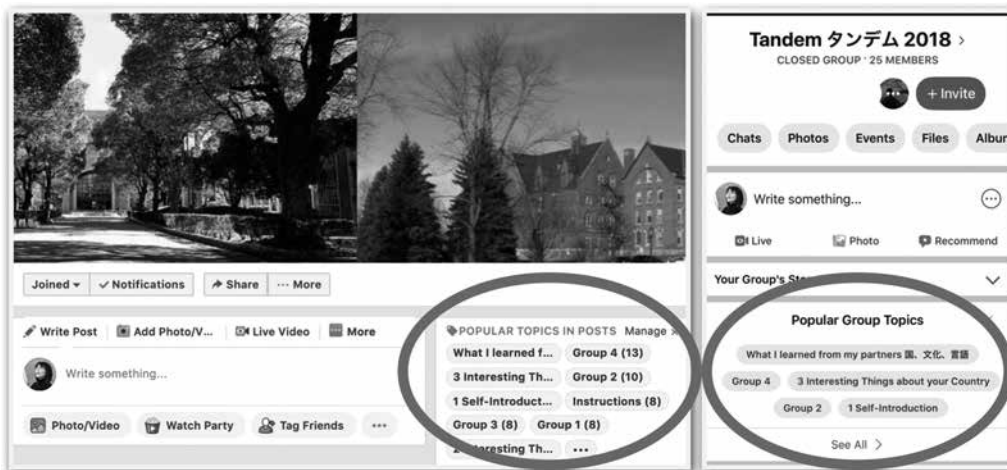


図3 Facebook Group の“Group Topics”一覧表示：(左)PC画面；(右)スマホ画面

3. 実践結果

前節では、交流プロジェクトの活動内容と、やりとりへの参加促進をねらった活動設計を見た。ここでは、事前事後の質問紙調査、事後の振り返りレポート、課題遂行の観察に基づいて、参加者にとって、本交流プロジェクトが有意義かつ肯定的な英語使用経験となったか、意図したサポートが機能し、積極的な参加促進に役立ったかについて検討していく。

3.1 動画ベースの交流に対する満足度

まず、本交流プロジェクトの要となる「動画交換をベースとする交流」についての一般的なフィードバックを見ておく。事前調査では「やる気があるか／気が進まないか」について、事後調査では満足度について、それぞれ5件法で聞いた。表4に示すように、事後の満足度が平均4.4と非常に高く、ほぼ全員が「5. とても満足している」あるいは「4. 満足している」と答えている。事前調査でも肯定的な意見が多かったが(3.9)、実際に体験してみてもその良さが実感できたことがうかがえる。

- Q1 (事前)：グループでビデオを作って、お互いにビデオを見てコメントしあうというやり方についてどう思いますか？ (5：とてもやる気がある 4：そこそこやる気がある 3：やる気があるともないとも言えない 2：ちょっと気が進まない 1：とても気が進まない)
- Q2 (事後)：グループでビデオを作って、お互いにビデオを見てコメントしあうというやり方に満足していますか？ (5：とても満足している 4：満足している 3：どちらとも言えない 2：不満だ 1：とても不満だ)

表4 動画交換を軸とする交流について：やる気（事前）と満足度（事後）

	5	4	3	2	1	N	M (SD)
Q1	2 (18.2%)	6 (54.6%)	3 (27.3%)	0	0	11	3.9 (0.7)
Q2	6 (42.9%)	7 (50.0%)	1 (7.1%)	0	0	14	4.4 (0.6)

ここで、グループ動画と個人動画についての自由記述式回答を見ておく。(1a)に示したように、グループ作業の利点を挙げているものがほとんどで、「緊張せずにできる・楽しい」「協力できる」「[グループ内で]コミュニケーションがとれる」点が肯定的にとらえられている。また、「グループによっていろんな動画の撮り方があって面白かった」「みんな(動画の)出来が良かった」との回答から分かるように、協力して仕上げた動画が楽しめるものだった点も満足度を高める要因となったと思われる。

「グループ作業による外国語不安の緩和」について言えば、グループ作業にしたことで、期待通り、「不安」が高い参加者でも楽しく取り組めたと考えられる。ただし、グループではなく個人での作成のメリットをあげた者も1名いた(1b)。少数派とは言え、英語習熟度が高い参加者はこのように感じる可能性があることは留意したい。なお、この回答者もグループのメリット(楽しい)自体は認めている。不安軽減の点では、動画作成をグループ課題としたことは、期待通りに参加をサポートしたと考えられるが、後述するように、この方式には問題も生じうることも観察された(3.3を参照)。

(1) グループ動画と個人動画について

a. (グループのメリット：10件)

- グループの方がメンバーと楽しく動画作りが出来て良かったです。
- 個人の動画よりも緊張せずに取り組めた。
- 個人で撮るよりも楽しくできました。
- グループで作成したほうが協力もできるし楽しくできるのでかなり良かった。
- グループ動画は手分けして作成したのでスムーズに出来ましたが、個人撮影は全部自分で作成しないといけないので少し大変でした。
- グループでやることでチームワークやコミュニケーション能力を高くなった。
- グループでやることによってコミュニケーションが取れて良いと思う。
- グループによっていろんな動画の撮り方があって面白かった。
- みんな出来が良かった。

b. (個人のメリット vs グループのメリット：1件) 個人の方がよりよく発想を使って会話を作れる。グループは皆と楽しくやることができる

次に、本プロジェクトでは経験しなかった同期型コミュニケーションについて、参加者がどのように感じていたか、同じく自由記述式回答で聞いた。このプロジェクトでは、習熟度の低い言語学習者にとっての非同期型コミュニケーションの利点(外国語不安を軽減し、表現・理解を助ける)を重視したが(2.4)、インパクトが強いのは同期型であるため、興味・意欲がある(不安が低い)人は、都合を合わせてビデオチャットにトライすること

も推奨していた。興味を示しつつも実際トライした者はいなかったことを踏まえ、「ビデオチャット (Skype) のように、同時に会話することについてどう思うか」を聞いた。「いいと思う」のような漠然としすぎているものをのぞくと、回答のタイプは (2) のように整理できる。

(2) 動画を利用したコミュニケーション (非同期型・同期型) ついて

a. (非同期 > 同期 : 3 件)

- タンデムの時点でほとんどの単語を調べながらやっていたので、ビデオチャットはおそらく難しくてできないと思います
- すぐに英語が出てこなく、気まずい雰囲気になったりしそう
- 個人でやるのはとても大変だと思うが、グループなら楽しいと思う

b. (同期 > 非同期 : 2 件)

- ビデオチャットは、自分はどこかできるかできないかすぐに発見できて、直すことができる
- Face to Face で話すビデオチャットは外国語の練習にいいと思う

c. (今回のプロジェクトの良さ : 5 件)

- 文でやり取りをするより、顔を通してやりとりをした方が、相手の表情などからも読み取ることが出来るのでいいと思いました
- 実際にあって会話しているわけではないがそのような感覚を味わえてよかった
- 相手の住んでいる地域の景色や相手の表情などがみれるので面白かった
- 動画を使って話すことでより知ることができてよかったです
- お互いの文化を知ることができて良い機会になった

d. (主語不明 : 2 件)

- 互いの違いを学ぶ近道になる
- 海外とも会話できるのが良いと思う

(2a) は、同期型コミュニケーションに対する「不安」を表明しているタイプである。未経験でも「外国語不安」を引き起こしそうな状況に敏感な学習者と言える。ただし、(2a) のように「外国語不安」が高い者でも、「グループなら」楽しめそうだと前向きな面を見せている点は興味深い。一方、(2b) は、同期型に対する不安よりも、言語交換 (外国語学習) の点では同期型の方が効果的である、というメリットの方に注目しているタイプである。実際その状況になったらどう感じるかは不明であるが、少なくとも (2a) タイプよりは「外国語不安」は低いと考えられる。今回は日米の時差を紹介した程度だったが、不安の低い学習者に対して、同期型によりトライしやすくなるようなサポートも検討したい。

(2c) は、明らかに質問の意図を誤解して、今回経験した非同期型の動画交換について述べているタイプであり、(2d) は、同期・非同期を比べているのか、どちらかについて言っているのか判別できないタイプである。彼らについては、同期型ビデオチャットという状況で「外国語不安」を感じるのかどうか確認できなかった。次の調査では質問形式を修正する必要がある。しかし、少なくとも、テキストベースのコミュニケーションと比べた時の「動画の伝達力」の利点は、ほとんどの参加者が評価していると言っていいだろう。

なお、実際、どの程度積極的に「やりとり」に参加したかを確認するには、動画に続くテキストベースのやりとりを分析する必要があるが、現時点ではその実態を示す用意がない。個人のコメント数は手作業で確認するしかなく、また、投稿1件あたりの文章量のばらつきも大きいからである。図4に異なるグループのスレッドの一部を示す。図4左のスレッドでは、投稿1件あたりの英文は20～30語ほどだが、図4右では、最初の投稿が約190語、それに対する反応が約80語であった。また、コメントの応酬が短い間隔で続く部分もあれば、反応が遅すぎたために返信がこなかったと思われる投稿もある。これらを含めてやりとりの実態を確認するには手作業でデータ化する必要があるが⁽¹⁴⁾、それは別稿に譲ることとしたい。

ここまでは、「動画交換をベースとする交流」に対する満足度が非常に高く、動画をベー



図4 グループ別のコメントのやりとり

(14) この点について、EuroCALL 2019でFacebook Groupを使った交流実践についてご発表された国立台湾海洋大学のHsin-Chou Huang氏らとの意見交換をした際、Facebook Groupでの産出データの管理は、TAを使って手作業で行う(コピーペースト)ことも可能だが、NCapture (NVIVO)などのプログラムが利用できるとの情報を得た。今後の利用を検討している。

スとした交流が、肯定的な経験となったこと、①動画の伝達力、②非同期型コミュニケーション、③グループでの動画作成による参加のサポートが期待通りに機能したことを確認した。以下では、このプロジェクトが、異文化交流や交流相手と彼らの文化に対する興味・関心を高めるのに役立ったかどうかを見る。

3.2 異文化交流体験

まず、日本側の参加者がこのプロジェクトに期待していたことをまとめておく。事前調査で、「このプロジェクトに期待すること」を自由記述式で回答してもらったところ、表5に示すように、交流相手のアメリカ人と人間関係を築くことが前面に出てきており、次に多かったのが相手文化(生活)を知ることに対する期待であった。これらと比較すると、言語力の向上への言及は少なめであった。なお、「前期に行った交流活動を振り返って改善したいこと」も聞いており、表5ではその回答を*印でマークしている⁽¹⁵⁾。

表5 交流プロジェクトに期待すること (自由記述式回答より：N=11)

人間関係	友達を3人は作りたい! / 仲良くなって交流を深めたい。 / 外人と仲良くしていきたいと思う。 / いろんな人と交流を期待します。 / 学校だけでなく日常生活で関わられるようになることを期待しています!! / *前期はあんまり関わることも少なかったような気がするので今回のフェイスブックはいいと思う。
異文化+新知識	互いのことや国などについて知る良い機会なので積極的に取り組んでいきたいです。 / 相手側の生活について知りたい。 / *みんなが普段どんな生活を送っているかを知りたい。 / 自分の考えにはないことを交流を通じて得られたらと思います。
言語	*もっと英語をカンペを読まずに読めるようにする。 / *練習をしっかりとスムーズなビデオにしたい。 / *前よりも上手く、緊張せずに英語を話せるようにしたいです。
その他(漠然)	楽しい交流にしたい。 / 話をしたい。

このように、日本の参加者の多くは、交流相手と親しくなり、彼らの文化(生活)を知ることが期待していた。本交流プロジェクトが、彼らの異文化交流への関心や、交流相手および彼らの文化に対する興味・関心をさらに高めるのに役立ったかどうかを確認するために、Q3、Q4に対して5件法で回答を求めた。表6に示すように、Q3、Q4ともほぼ参加者全員が肯定的な回答であった。

- Q3 (事後) : このタンデムプロジェクトのおかげで、異文化交流への関心が高まった。
- Q4 (事後) : このプロジェクトのおかげで、パートナーやその文化について興味が出てきた。

さらに「このプロジェクトはどのようにあなたの期待に応えたか」という質問にも回答

(15) 日本側では、前期にコロンビアとのテキストベースの異文化交流を中心とした授業を行った。この交流は室蘭工科大学 Hagley 氏の主導による大規模プロジェクトの一部である。この大規模プロジェクトについては Hagley (2016) を参照されたい。

表 6 異文化交流, 交流相手とその文化に対する興味関心へのインパクト (事後)

	5	4	3	2	1	<i>N</i>	<i>M</i> (<i>SD</i>)
Q3	7 (53.9%)	6 (46.1%)	0	0	0	13	4.54 (0.52)
Q4	9 (64.3%)	4 (28.6%)	1 (7.1%)	0	0	14	4.57 (1.1)

(5: 当てはまる 4: ほとんど当てはまる 3: 半分くらい当てはまる 2: 少し当てはまる 1: 全く当てはまらない)

を求めた。自由記述式の回答 (14 件) を見ると、この点に関する評価は 2 タイプに分けられる。このプロジェクトを通して、(3a)「実際に外国人とやりとりができてよかった」というタイプと、(3b)「異文化の知識が得られてよかった」というタイプである (両方に言及した回答もある)。言及の量、表現の具体性やバリエーションの点から、「実際に外国人とやりとりができた」という体験そのもののインパクトが強かったことがうかがえる。参加者は、もともとの期待が交流相手と親しくなり、彼らの文化 (生活) を知ることを期待しており (表 5)、プロジェクトで実際に異文化交流を体験し、英語を使って交流相手とのやりとりを楽しむことが満足感につながったと考えられる。

(3) 自由記述式: プロジェクトがどのように期待に応えたか

- a. 外国人とのやりとりができた: 外国人と交流でき、実際に英語を使うことができたのでタンデムはとてもいい場だった/外国の人との交流は初めてだったが、グループで協力して上手く出来た/異文化コミュニケーションがよくできた/ビデオでお互いの顔が見えて感情がわかりやすく、海外の人とのコミュニケーションに抵抗がなくなった/相手の人が優しく丁寧で、やり取りが楽しかった/つたない表現でも相手に伝わって自信になった/本場の英語に触れられた/将来海外旅行する時など今回の活動が役に立つ
- b. 異文化の知識が得られた: 動画で文化や行事が分かり、楽しかった/文化の様々な違いを知れた/他の国の文化を知ることが出来た

ここで、彼らがこのプロジェクトでの体験をどう感じたのか、もう少し具体的に知るために、事後の振り返りレポートの一部を、(4) に紹介する。言及されているパートナーの名前は仮名にしてある。括弧内は書き手を識別するための記号と英語力診断テストで判定された CEFR のレベルである。

(4a)~(4d) のいずれの記述でも、実際にうまくいったコミュニケーション体験が報告されている。自分の英語が通じた喜び (4a, 4d)、趣味などについて会話ができたこと (4a, 4b)、共通点を見つけて感じた親近感 (4a)、日本語と合わせて聞くことで少しずつ聞き取れるようになったこと (4b)、非言語情報 (笑顔, 実物) を活用したこと (4c)、ツッコミをもらいやすい話題を取り上げ、実際にツッコミを得たこと (4d) といった成功体験が、自分の英語力ないしコミュニケーション力向上の実感につながったことが分かる。参加者 C のスピーキング力向上 (4b) について補足すると、C は、最初はどうしてもカメラの方に視線を向けられず、また間も取らずに単に「読む」だけになってしまうという問題があったが、最後の個人動画では、そうしたデリバリーの問題はなくなっていた。

さらに、(4c)では、「自分の目と耳で得た一次情報が二次情報よりも印象深い」というメタ認知的な気づきや「自分が無自覚にもっていた前提」の相対化が起こっていることが見てとれる。(4d)の参加者は、自分のコミュニケーションをモニタリングしており、テレビ等で得た文化的知識がすぐには一般化できないことが自覚できている。また(4e)では新しい文化的知識を得たことも重要だが、「自分自身の固定観念、物事の理解の仕方をこわした」ことが重要な学びだったと述べており、異文化についてのメタ認知的な気づきが言語化できている。なお、この学習者の振り返りでは成功したコミュニケーションには触れられていなかったが、これは参加者Kがコミュニケーションに困らない英語力があつたためだと考えられる。

(4) 振り返りレポート：交流での成功体験・成長

- a. It was a valuable experience that I was able to improve my skills to communicate with other people by communicating about American cultures and traditions. I was very happy when I made myself understood by my partners despite my poor grammar. People who interacted with me liked Japan very much and we had things in common. They liked ramen very much and I like ramen very much. This made me feel very close to them. (J; A2; 文法レベルの修正あり)
- b. アメリカとコロンビアの人達と交流して交流する前よりコミュニケーション能力とリスニング力が確実に向上したのではないかと感じました。アメリカの人達との交流で Kyleさんと Joeさんと動画で文化についてや、アニメについて、そして趣味など動画を通して会話することが出来、英語と日本語で話してくれるので単語一つ一つの意味を理解して日本語と照らし合わせて理解することが出来るため、その結果少しずつですがリスニング力などが上がってきたのではないかと感じ、また自分のスピーキングもまだまだではありますが前に比べると喋れるようになったと感じたので [...] とても良い交流であったと思いました。 (C; A1-A2)
- c. 私の交流での英語は調べたりしたものも多く間違っていることも多いが、それを伝えるためには言葉だけに頼らずに笑顔で話してみたり写真などを利用することが大事だ。[...] ジェスチャーや写真を使って話せば言葉は通じなくても視覚を通して伝わるはずだ。私の動画でもより伝わるように草加せんべいを実際に持ってきて発表した。Emmaさんの最後の動画でもせんべいの写真ができたとき私の発表した“せんべい”が伝わったと感動した。[...] この交流は多くのことを学ぶ機会でもあった。例えば、私のグループでの Emmaさん、Harryさんとのやり取りであったサンクスギビングなどの日本にはない文化、逆に日本独自の猫カフェや食文化なども実際にその国の人の言葉で聞くとネットや本などの媒体で知れるような一般的な情報ではなく、その個人を中心とした細かな情報がわかるのでとても印象に残りやすいものであった。 (D; A1-A2)
- d. 交流をしているだけでなく自身のコミュニケーション力が上昇しているのだと過去の動画を振り返って実感した。[...] 異文化交流で互いに文化を shareした [際、] 文化は互いに違う部分は必ずあるが、その中でも相手がツッコミを入れやすいものを取り上げた。Topic3では、日本ではクーポンの利用制限は一枚だがアメリカでは何

枚でも使えるといった違いを取り上げた。しかし、交流相手の Emma は “It is only mania to do such a thing.” と言いマニアだと指摘してくれた。つまり、ツッコミを入れさせてコミュニケーションが続くように努力した。(G; A1-A2)

- e. Through conversations with American friends, I learned a lot about American culture that I didn't know. It was very interesting to see that I used to think that Americans love to eat burgers, but in fact, they also like Mexican food, French food, Asian food, etc. This made me realize the importance of understanding different cultures. [...] As I mentioned earlier about Americans eating burgers, through this program, I broke the stereotype I had about American food. I also learned about the diversity of American food culture. ... This is also a very important point I learned through this program: breaking my own understanding of things.(K; B2; 語彙レベルの修正あり)

振り返りレポートを見ると、彼らの異文化交流体験は、「良い経験だった」というコメントからは分からない、様々な学びの契機となっていたことが分かる。

ここで、異文化コミュニケーションに関して「文化を知った」以上の深い気づきに言及した(4c)～(4e)に注目したい。こうした気づきが、実際の(非同期型の)やりとりの中から生じるには、最低でも B1 レベルの言語力(2.1, 表 1)が必要だと思われる。仮に英語のみを使用するプロジェクトであれば、参加者 K 以外は、このような学びを得るのは難しかっただろう。その意味で、本プロジェクトでの「二言語使用」は、習熟度の低い外国語学習者が異文化に対する理解と関心を深めるのに貢献したと考えられる。

深い理解や思考には、使いこなせる言語が必須である。Cultura という異文化交流プログラムでは、この考え方を基盤として、お互いに母語を使う二言語交流が提供されている。そこでは、母語で書き、目標言語で読む、という形でやりとりが行われる。自分の母語で思考を十分に言語化すると同時に、母語話者が書いた文章が良質のインプットとなり、間接的に目標言語でのアウトプット力が高まると考えられている(Chun, 2014)。こうした実践も参考にして、二言語利用の可能性を検討していきたい。

最後に、自分が「できなかった」ことに(も)焦点を当てている振り返りを(5)に紹介する。(5a)は「自分の英語が通じた・伝わった」という経験ができ、やりとりも楽しめたが、今の英語力は、日常で使えるレベルではないという認識を端的に述べている。実際、語彙・文法の知識の面でも初級レベル(A1-A2)の参加者が多く、「言いたいことが伝わった」としても、「うまく喋ることはできない」(5b)、「相手が何を言っているのか聞き取れない」(5c)と感じるのは当然である。(5c)の参加者 I は、(4b)の参加者 C と同様に日本語とも照合しながら繰り返し聞言いたことがうかがえる。それができるのが本プロジェクトの利点ではあるが、その状態では同期型コミュニケーションにはついていけないという認識も妥当である。

(5) 振り返りレポート：英語力に対する認識

- a. アメリカの学生との動画交換とコロンビアの外国の学生と交流してわかったことは、意外とすごい発音が悪い英語でも一応は通じるということと、共通の趣味があった

り話が合うと違う言語だとしても話が盛り上がること、いかに自分の英語レベルが低いかということ、相手側の日本語がかなり上手いこと、動画のクオリティが高い事、私達が日常で英語を使うことができるレベルまで遠いこと、様々な事を身に染みて感じることができました。(H; A1-A2)

- b. 高校では将来英語が必要になるという事を知っていたため頑張って勉強した。だが、それが実際なんの役に立つのかさっぱりわからなかった。しかし [...] 実際に海外の人とコミュニケーションを取ってみると今までに習った事[文法など]の使い道を理解した。それは嬉しい事だが、今までを適当にやってきましたためうまく喋れる事ができないのがオチであった。それが私はすごい悔しかった。(A; A1-A2)
- c. 1年を通して交流してきて思ったのは、相手が何言ってるかを聞き取ることがほとんどできなかつたってことです。何度か繰り返し聞き、訳しながら聞けば理解はできるが、それを海外ですべては会話にならないし成長できない。(I; A1-A2)

外国語は、コミュニケーションの中で使わなければ上達しない。「まだまだ遠い」と思っている不自由な段階でこそ、どんどん使っていくべきである。その意味で、「できない」という自己認識から、(6)のように今後も使っていこうと考えるようになったのであれば、それは重要な学びだと思われる。

(6) 振り返りレポート：英語使用・学習意欲

- a. この経験を今後活かしたいなとも思いました。[...] 私の場合はよく外国の人とゲームでチャットをするのですが、その時に使いたいなと思います。(H; A1-A2)
- b. 好きな洋楽を聴いてみてニュアンスを覚え、気になったところは調べるといった作業をすればいいとおもう。[...] 難しく考えず歌を歌う感じで明るくハキハキと喋れば外国人にも伝わるだろう。結果的にこれからはコミュニケーション能力をつける事が英語を覚えるキーになるかもしれない。(A; A1-A2)
- c. 今よりも聞き取れるようになりたい。その為にも英語の歌や、映画、実際に海外の人と話してみたりしていかないといけない。1番実力をつけやすいのは直接会話してみる事だと思うが、今の私の実力ではなかなか難しいので、英語の得意な友達と一緒に話しながら少し英語に慣れることが必要になってくると思う。(I; A1-A2)

リスニング力が不足している参加者が多いことは承知していたが、リスニング(音声認識)力を鍛えることを意図した活動は、今回のプロジェクトには組み込んでいない。英語力にばらつきがあり、その種の活動が全く不要な参加者もいたためである。参加者I, Cのように、各自で必要に応じて自発的に反復視聴を行うことを期待していたが、日本語に頼りきりの参加者もいたと思われる。次のプロジェクトでは、内容を理解した上で英語にも耳を傾けるようフォローしていく必要がある。

3.3 活動の実態

前節で確認したように、参加者は動画ベースの交流活動に非常に満足しており、この交流プロジェクトが異文化交流や交流相手とその文化に対する関心を高めるのに役立ったと

感じている。

しかし、実際の活動状況は、コンスタントな参加の点で課題が残るものだった。動画課題のトピックは(1)自己紹介、(2)自分の国の興味深いこと、(3)相手の国の興味深いこと、(4)パートナーから学んだこと：国・文化・言語の4つであった(2.2)。やりとり全体を通じて彼らが話題にしたことをまとめたのが表7である。課題動画の中で、そしてそのコメント欄で、実に多彩な話題でやりとりを行ったことが見てとれる。ユニット1の項目が多いのは、自己紹介で触れた話題に関連して話題が広がっていったためであり、また後述するように、それだけコメント欄でのやりとりが多かったからでもある。

表7 交流における話題

	日本側の動画 (+コメント)	アメリカ側の動画 (+コメント)
ユニット1	(1) ツーリング、ドライブ、ショッピング、寿司、ラーメン、ピザ、焼肉 (+車酔い、柔道、韓国の武道、ジープ、服の好み) (2) ジョージ・クルーニー、ジョニー・デップ、トム・クルーズ、ウォルト・ディズニー、サッカー、ゲーム、漫画、草加煎餅、アクション映画、国内旅行、江ノ島、釣り、ディズニー、フロリダ、ディズニー映画、キャラのサイン (+ホラー映画、ハロウィン、ミュージカル、SF映画、サッカーチーム、PS4、RPG) (3) サンディエゴでの暮らし、野球、アメリカの世界大会、ドラムとテニス、UKでの暮らし、北海道、バスケット、サッカー、アメリカのバスケット、アニソン (+北海道でホームステイ、ジャズ、田舎の風景とアニメ) (4) 四川省、福建省、京都、東京、アメリカのドラマ、映画、アニメ、野球とサッカー、将来の夢 (+火鍋、ジブリ、アニメで日本語、サッカーのポジション、プロ野球チーム、京都観光)	(1) ジョギング、競技射撃、大学の射撃クラブ、銃規制 (+バイクでの旅、ダンスクラブ、ballroom dancing、ロッククライミング、漫画、ドライブ) (2) 教員志望、ルームメイト、バーモントの冬、歴史、絵、演劇、クラリネット (+写真が趣味、日本の景色、トランペット) (3) 日本語、漢字、サックス、楽器、留学、授業が地獄、中華料理、ホームステイ、アニメ、水泳 (4) 教員志望、バーモントとバージニア、髪を切る、日本の家庭料理、町歩き、和太鼓クラブ、和歌、日本の伝統、絵、ゲーム、アニメ、小説執筆、バーモントのサイズ (+日本留学、RPG、ルームメイト、中国語、七五三、正月、サンクスギビング)
ユニット2	(1) カラオケ/温泉/寿司・納豆・豆腐 (2) おでん/ラーメン/納豆/草加煎餅 (4) 居酒屋/カラオケ	(1) 中国の端午節/秋のかぼちゃ (2) サンクスギビング (+そばと寿命) (3) ジャズ (歴史、演奏の面白さ) (4) 幽霊、アメリカ料理、TRPG
ユニット3	(1) ハンバーガーやフライドポテト/米軍基地で見た飲食物のサイズ/飲酒運転 (2) トイレのドアと床の隙間/クーポン使い/日米のディズニー (3) 日米アニメの違い (翻案、年齢指定) (4) アメリカの食事/日米のマクドナルド/日本のオリジナルバーガー/アメリカ映画	(1) 日本のラーメン/面白いカフェ (2) ゆるキャラと猫カフェ (3) 達磨/お好み焼きと奥の島 (4) 歴史・寺や文化・平家物語/秋葉原

(*括弧内の数字はグループ)

ユニット2やユニット3では、調べたり考えたことをまとめたプレゼンテーションの要素が強い動画が多かったのに対し、ユニット1は初めて会った人同士のスモールトークのようなものだったとも言える。以下に、ユニット1におけるやりとりの抜粋を紹介する。非常に凝った動画で「You Tuber のようだ」と他のグループからも好評であった(図5)。

(7) に、この投稿動画に対するコメント(返信)の一部を紹介する。#付きの番号は投



図5 グループ4 (米) の自己紹介動画

稿を識別するもので、名前は全て仮名である。ここでは全員が二言語で書いていたが、以下の引用では日本側の投稿では英語のみ、アメリカ側の投稿では日本語のみを出している。日本語を省略した箇所は〔日本語〕、英語を省略した箇所は〔英語〕でマークした。

コメントのフォーマットは (7a) のように全員に対するコメントを1つの投稿にまとめる形と、(7c) ~ (7e) のように、1人ずつ投稿を分けてコメントする形が見られた。今回はフォーマットの指定はしなかったが、前者は非常に長い投稿になってしまうことが確認できたため (実際は下記抜粋の2倍)、スマートフォンを利用する者が多い場合は特に、視認性の点で後者のフォーマットの方が望ましいと思われる。

コメントで始まった話題の継続ターンは、長いものでも3ターン (#3-#8-#9, #3-#10-#11, #33-#34-#35) と短めだが、少しずつ話題を広げていっていることが分かる。例えば (7a) では、Tina が自分は「中国人」だと言ったのを受け、Susan は「中国語」という新しい話題を取り上げており、(7b) では、自己紹介動画を受けた Ryo の「正月」についての質問に関連して、James が「サンクスギビング」の話を持ち出している。

(7) 自己紹介動画に対するコメント (抜粋)

- a. #3 Tina : Hey guys! Thanks for your video! Very interesting!!! And sorry about comment so late! And I'm a Chinese, so my English and Japanese are not so good, sorry about that! 🙏🙏🙏🙏🙏 [日本語]
 Hi Susan! Your hair is so beautiful!!! 😊 I cut my hair for two times and I thought it was interesting! 😊 You said you will come to Tokyo next year, wish you will have a good time at Tokyo and can't wait to see you! [日本]
 Hi James! You are playing Taiko very well!!! 👍 I'm surprised that you did it so good! It's so awesome!!! And It's so amazing that you also are the president of Taiko Club! And I hope i can watch your Taiko performance! 🙏🙏 [日本語]
 Hi Jake! Looks like you have a lot of interesting hobbies! By the way I like to watch American TV shows when I have free time! You said you want to find a English teacher's job at Japan. It's so nice!!! And don't worry about your

Japanese, you already speak very well! [日本語]

○ #8 Susan > [英語] こんにちは, Tina さん! 東京に会いましょう。パーモン
トはとても小さいから, 大きい都会はこわいです。いい食べ物はどこですか?
手伝えますか? 千葉はと中国とはどう違うのですか? 私のルームメイトはアメ
リカ人ですが, 両親は中国人です。それから中国語を話せます。時々, 中国語
単語を教えるが, 私はいけないと思います。

■ #9 Tina > Hi Susan! I'd love to show you around Tokyo when you come
here! I think living in Japan, the rhythm of life so fast and everything is
so convenient. Mandarin is so so difficult to me too lol. But I can teach you
some words if you want! [日本語]

○ #10 Jake > Tina さん, 遅れてすみません。私の日本語をほめてくれてありが
とう! 他に「フレンズ」, Tina さんの三つの好きなアメリカのテレビプログ
ラムは何ですか。[英語]

■ #11 Tina > Hi Jake! I think they are “How I met your mother”, “Game of
thrones” and “The Walking Dead”! [日本語]

b. #14 Ryo : [日本語] Hello James. The drum performance is good. I wanted to see
it someday. Speaking of Japanese tradition there is a New Year. On New Year's
Day, relatives gather on January 1st and celebrate the beginning of the year
together. What kind of tradition are there in America?

○ #15 James > アメリカのお正月を祝い方は同様だと思います。私は家族と会っ
て午前 12 時へ待つためにクラシックな映画を見ます。特に, 私の母は好き
ですからヒッチコックが作られた映画を見ます。そして, 午前 12 時になると,
新年に幸福をもらうために, シャンパンで乾杯します。次の日, 親戚に会いに
行きます。[英語] 他の人は同僚と祝います。正月はロマンチックな側もあり
ますから, 時々, 二つ恋人が集めて午前 12 時にキスします。この部分は日本
のクリスマスみたいでしょう。[英語]

c. #29 Shin [日本語] Hello! Jake. You surprised that your videos are highly complete!!
It is really fun! There are many animations in Japan!! If you come to Japan let's
go to Akihabara together!!

○ #30 Jake > Shin さん, ありがとうございます! コメントが遅くてすみませ
ん。ほー, 秋葉原?! 私はいつも秋葉原に行きたいでしたよ! Shin さんと秋葉
原に行くはすごいだろうが思います! ありがとうございます! ついに日本に
行くと, 喜んで受け入れるよ! [英語]

d. #31 Shin : [日本語] Hello Susan ! Susan is good at Japanese! Please have
confidence! I think English teacher is a very good dream!! Please do your best!
Let's have lots of talking together when you come to Japan!!

○ #32 Susan > Shin さん, ありがとうございます! 会いましょう! 😊 [英語]

e. #33 Shin : [日本語] Hello Jake ! You like taiko is very cool! I have not praying it.
Come and tell me! Please do your best at the department manager!! I am
expecting to play in Japan!!

○ #34 Jake > はい、頑張ります！いつか、日本の組み太鼓サカルと演奏したい
 ですから、一生懸命に練習しなければなりません！ [英語]

■ #35 Shin > Please contact me when that time comes!! I want to go see it!
 [日本語]

(7) の抜粋から分かるように、グループ内での複数の参加者同士のやりとりなので、必ず反応する相手に呼びかけている。動画の中でも、毎回、日本の参加者は "Hi xxx!", アメリカの参加者は「xxxさん、こんにちは」といった呼びかけから始めていた。動画で話したり笑ったりしているところを見て、毎回名前を呼んで話しかけることで、グループ内のメンバーについてはかなりの親近感が湧いたと思われる。横から見ているだけの筆者ですら、直接話したわけではないが、交流相手のアメリカの学生さんたちとは知り合いになったような感覚があり、何に興味があってどんな人柄に見えたか、交流終了後もすぐに思い出せる。テキストベースの交流でやりとりを見ていてもこの感覚は起らないことから、顔認知が人間にとって重要なのだと実感する。参加者も同じような感覚をもったとすれば、「友達を作りたい」「知り合いたい」という期待が満たされたと感じるのも納得できる。

最後に、(7) は学習中の言語で書いた部分のみを引用しており、言語の誤りもあちこちに見つかるが、修正が全く行われていない。意味解釈にあまり影響しない誤りもあるが、「時々、中国語単語を教えるが、私はいけないと思います」など、解釈が難しいものもある。このプロジェクトでは二言語が使われているので、“She tries to teach me words but I'm not very good.”を意図していたことがすぐに確認できる。これにより、やりとりは継続させやすくなっているはずだが、「言語交換」を活用するには、修正フィードバックが欲しいところである。会話が継続しているところで修正を入れるのは、なかなかやりにくいものなので、動画に対する最初のコメントでは、内容に対するリアクションに加えて、言語の修正も1つか2つ入れる、あるいは、誤り修正のための“You said xxxx but we say xxx”のようなシンプルなパターンで作った短い動画でコメントする、といった修正フィードバックを「課題」とすることも検討していきたい。

さて、(7) の抜粋は、期間全体を通じてもっとも投稿件数が多かったコメント欄からのものだが、ユニット1については総じてどのグループでも「活発」なやりとりがあった。全体像をつかむために、各動画に対するコメント件数をまとめておく(表8)。非常に分量の多い投稿から“Thank you!”のようなごく短いものまで一律に1件とカウントしているため、外国語の産出量について一般化できることはない。しかし、平均6.3件という数字は活動頻度の目安としては役に立つ。例えば、1つのユニットで(7b)や(7c)のようなやりとりを6回分と考えると、初中級者にとっても無理なくこなせる分量だと思われる。

表8 ユニット1のグループ別の返信(コメント)数(N=26)

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	合計
日本の動画への反応	14	25	13	22	76
アメリカの動画への反応	20	17	16	35	88
合計(平均投稿数/人)	34 (5.7)	42 (7.0)	29 (4.8)	57 (7.1)	164 (6.3)

上級の学習者には内容や回数の中で負荷を大きくするという差異化も可能だろう。

ユニット1のような「活発」さが持続すれば問題はなかったのだが、実際は、動画に対する返信（コメント）の数はユニット2以降激減した。ユニット4は動画投稿までで時間ぎれになったため(2.1)、ユニット1からユニット3に限って、動画1件あたりの閲覧数・返信数をまとめておく(図6)。ユニット1では動画1件あたり20.4件の返信があったが、ユニット2では約1/4に減っている。なお、動画数に違いがあるのは、ユニット2では課題未提出のグループがあり、ユニット3では個人で動画を提出したグループがあったためである。

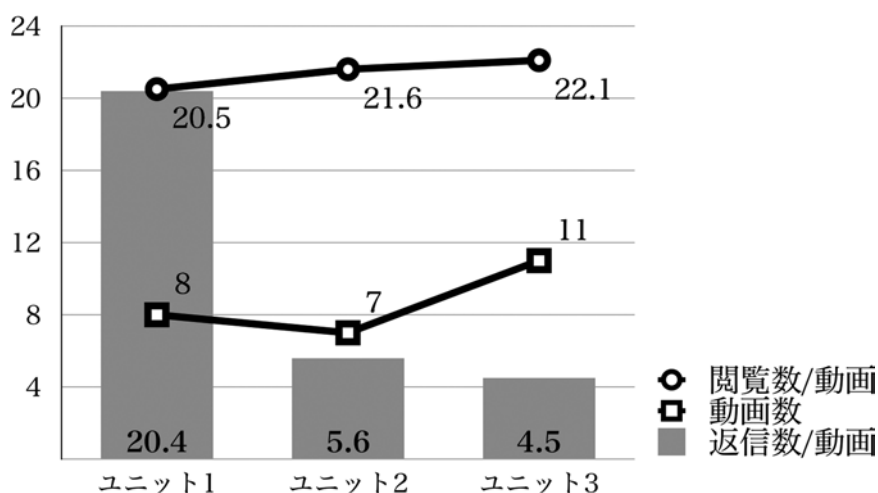


図6 動画1件あたりの閲覧数・返信数の推移

ただし、図6でも確認できるように動画投稿の閲覧数は減っていない。「閲覧数」は閲覧回数ではなく閲覧人数であり、同じ投稿を同じ人が何度見ても、カウントは増えない。参加者22名と教員2名で最大閲覧人数は24名であることから、ほぼ全員が(動画を見たかどうかは別にして)他のグループの投稿も含めて全ての投稿を閲覧したこととなる。以下に、ユニット1からユニット4まで、期間全体にわたる動画投稿数・閲覧数・返信数を実数でまとめた(表9)。ユニット4は個人動画としたため投稿件数は増えているが、投稿1件あたりの閲覧数は減っていない。動画を実際に最後まで見たのか、見たとしたら反応し

表9 全期間での動画投稿数・閲覧数・返信数

ユニット	動画投稿数	閲覧数	閲覧者数/動画	返信数	返信数/動画
1	8	164	20.5	163	20.4
2	7	151	21.6	39	5.6
3	11	243	22.1	50	4.5
4	19	403	21.8	11	0.6
	計 44	計 961	平均 21.4	計 263	平均 6.0

なかったのはなぜか等の疑問が生じるが、それらを探るのは次の実践に譲る。少なくとも交流プロジェクトに対する関心は全員が持ち続けたとは言えるだろう。

コメント減少の要因として、動画投稿がコンスタントではなかったという問題が考えられる。2週間で1ユニットという計画であったが、途中の休講期間中にコメント返しを含めて活動が滞ってしまい、次に進むタイミングを遅らせざるをえなくなったり、また動画投稿課題の締め切りが守れないグループも出てきた。一部の投稿の遅れは、パートナーからすれば待っている時に動画が投稿されないということであり、遅れて投稿された時には、自分が次の動画撮影の準備の方に労力をとられていてじっくり反応する余裕がないかもしれない。次の実践では、まず投稿の締め切り厳守を徹底させる必要がある。動画投稿だけでなく、それに対する反応も、タイミングが遅すぎるとやりとりが始まらない可能性がある。少なくとも投稿を見て最初の反応をするところまでを「課題」として締め切りを設けた方がよいかもかもしれない。

また、メンバーが集まって一つの動画を作るという課題について、グループによってはメンバーがそろう時間が作れないなど、課題遂行が難しい場合があることも示唆された。グループでの撮影は、自分を撮影することに対する抵抗感を緩和するために取り入れたのだが(2.4)、もし各自での撮影に抵抗がないなら個人動画の形も選択できるよう、活動設計を修正することを検討したい。

これとは別に、当初想定していなかった動画作成プロセスの要因が絡んだ遅れもあった。計画では、グループメンバーが集まって話しているところを撮影するというシンプルな作成プロセスを想定していたのだが、各自で撮影した動画を持ち寄って編集したり、他のグループに触発されて写真やBGM、特殊効果を挿入するなど仕上がりに凝るグループが出てきた。そうした工夫自体は悪いことではない(むしろ奨励したい)が、凝りすぎて時間がかかるのは問題である。また、これと関連して、編集作業を行った動画のサイズが大きくなりすぎてアップロードできないという問題も生じた。このような問題を想定していなかったため今回は迅速にサポートをすることができなかったが⁽¹⁶⁾、次のプロジェクトはこの点をクリアした状態で実施することができる。

投稿された動画は見応えのあるものが多く、取り上げられた話題も多彩であり、見るだけでも相当の学びが可能ではある。そうした動画を作成するために、知識や考えを整理して外国語で説明する活動は、産出のスキルを鍛えるのにも有効だったと考える。実際、英語力はまだまだだがデリバリーの問題が解消された日本の参加者Cのケースもある(3.1)。

しかし、動画の内容についてより具体的な点について理解を深めたり、関連する新しい話題に話を広げたりするには、コメントのやりとりが不可欠である。また、投稿者は達成感や満足感を感じ、動機づけを保つためにも反応は重要である。その意味で、最初の「活発」なやりとりが持続しなかった今回の実践はプロジェクトの良さを発揮しきれなかった

(16) Facebookでは最大4GB、2時間までの動画が投稿可能とされており、5分程度の動画であれば問題は何もないと考えていた。しかし、スマートフォンでは100MB、PCでは1024MBを超えるとアップロードに問題が起こる可能性があるようである(Wondershare)。パソコンやiPhoneの高画質設定で作成した動画は10分程度で1GBになってしまう。そもそも解像度とフレームレートの上限が720p、30fpsとされており、容量を抑えるためにも解像度の設定については周知しておくべきだろう。

と言える。

4. まとめと今後の課題

本稿では、2018年度に実施した「動画交換を軸とするクラス間言語文化交流」の実践を振り返り、参加促進を意図して設計した活動が、期待した通りに機能したかどうか、改善すべき課題を洗い出しながら検討してきた。

「動画共有+コメント」という形での交流活動に対する参加者の満足度は非常に高く、この交流プロジェクトは異文化交流や交流相手とその文化に対する関心を高めるのに役立ったと、ほとんどの参加者が感じている(3.1, 3.2)。多くの参加者にとって、異文化交流体験(動画の中で英語で話す/動画から交流相手や日米文化を知る/文字のコメントで「会話」する)が肯定的なものとなったようであり(3.2)、この点は本実践の成果と言える。

本プロジェクトにおける動画作成は、実際のオーディエンスに向けた準備のできる産出活動であり、初中級の学習者が使用経験を積むのに格好の活動であると考えられる。しかし、動画内容について理解を深めたり、そこから派生して知識や視点を広げるには、コメントのやりとりが不可欠である。その意味で、最初の活発なやりとりが持続しなかった今回の実践では、プロジェクトの良さを活かしきれなかったと言える。次の実践では、投稿の締め切り厳守を徹底させる必要がある、動画視聴後の最初の反応までを締め切りつきの課題とすることも検討したい。なお、コメント数の減少の理由ははっきりと確認できてはいないため、参加者の活動をモニタリングしていく必要がある(3.3)。

交流活動への積極的な参加をサポートすると期待された5つ要素—①動画の伝達力、②非同期型コミュニケーション、③グループでの動画作成、④二言語使用、⑤日米混合小人数グループ編成—は、概ね期待通りに、外国語不安を軽減し、表現や理解において外国語能力の不足を補い、交流相手との人間関係を作る助けになったと思われる。ただし、以下の点については改善の余地がある。

- 非同期型コミュニケーションの、同期型に対する優位性は「不安」がもともと低い、または慣れにより軽減された参加者には当てはまらない。授業時間内で同期型コミュニケーションを実施することは不可能だが、グループ内で同期型にトライしやすくなるようなサポートが欲しい(3.1)。
- 二言語使用により、必要に応じて自発的に反復視聴を行うことを期待するより、内容を理解した上で英語も聞くことを強制する仕掛け(課題など)を考案したい(3.2)。
- 単なる二言語使用ではなく、より「言語交換」を活用するために、言語に対する修正フィードバックを活動に組み入れたい。「動画に対する最初のコメントでは、言語の修正も1つか2つ入れること」というように、修正フィードバックを課題として組み込む形が考えられる(3.3)。
- グループで集まって動画を撮影するという課題は、話している自分を撮影することに抵抗がなければ、メンバー間の都合の調整といった面倒なところが表に出てくる可能性がある。初回以外は、グループごとに個人での撮影の形も選択可とする方向に修正すべきであるように思われる。それぞれの個人動画を合体させる方式を採りたいグルー

プに向けて、技術的な注意事項を周知する必要がある (3.3)。

以上、多くの課題が洗い出された実践ではあったが、「使用経験がない—上達しない—自信がつかない—使用機会を活用できない—上達しない」という膠着状態から抜け出す手助けとして、「動画交換を軸とするクラス間言語文化交流」が有望であるという手応えは得られた。技術的な面で実施のハードルが低く、習熟度別のクラス編成を想定していないことから、広く柔軟に運用できる言語文化交流の形であるとも考えている。参加者の学習者像をよりよく把握するために、質問項目や形式、および英語運用能力の判定方法についても検討しながら、より実施しやすく、学習効果の高い交流プロジェクトを目指して改善を重ねたい。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 19K00831 の助成を受けたものです。交流実践ではバーモント大学の Kazuko Suzuki Carlson 氏に多大なご協力を頂きました。ここに記して感謝します。

〔参考文献〕

- Chun, D. (ed). (2014). *Cultura-Inspired Intercultural Exchanges: Focus on Asian and Pacific Languages*. National Foreign Language Resource Center.
- Greer, T. & Yamauchi, M. (2008). “Pronunciation tasks for academic study skills”. In K. Bradford-Watts (Ed.), *JALT2007 Conference Proceedings* (pp. 553-561). – A summary of this paper was featured in *The Language Teacher*, 32 (10), 5-6.
- Hagley, E. (2016). Making Virtual exchange/telecollaboration main Stream—large Scale exchanges. In S. Jager, M. Kurek. & B. O' Rourke (Eds.), *New directions in telecollaborative research and practice* (pp. 225-230). Research. net.
- 林良子, 杉原早紀, Trummer-Fukada, Stefan. (2013). スカイプを利用した日本語・ドイツ語 遠隔タンデム授業の実践. 『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』 41, 44-54.
- 林良子. (2015). グローバル時代の外国語教育と情報発信—ICT を用いた遠隔共同授業の実践を通して—. 『コンピュータ & エデュケーション』, 39, 32-38.
- Helm, F. (2017). Two models of online intercultural exchange in higher education contexts. In Ennis, M. J. & Riley, C. E. (Eds.), *Practices in Intercultural Language Teaching and Learning*. Cambridge Scholars Publishing.
- 小林浩明. (2016). タンデム学習の意義と可能性. 『北九州市立大学国際論集』, 14, 135-145. https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=515&item_no=1&page_id=13&block_id=294
- 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説：外国語編. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018_10_1.pdf(閲覧日：2019.1.15)

- Mullen, T., Appel, T., & Shanklin, T. (2009) Skype-Based Tandem Language Learning and Web 2.0. In M. Thomas (Ed.), *Handbook of research on Web 2.0 and Second Language Learning* (pp. 101-117). New York: Information Science Reference.
- Mystkowska-Wiertelak, A. & Pawlak, M. (2017). *Willingness to Communicate in Instructed Second Language Acquisition: Combining a Macro- and Micro-Perspective*. Multilingual Matters.
- 中森誉之 (2016). 『外国語音声の認知メカニズム：聴覚・視覚・触覚からの信号』開拓社.
- NHK 英語力測定テスト 2018. NHK テキスト. <https://eigoryoku.nhk-book.co.jp/>
- 仁科陽江 (2011). タンデム学習の実態と対策—成功する自律相互学習のために. 『日本語教育連絡会議論文集』23, 80-90. 日本語教育連絡会議事務局. http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/recent_addition/item/45656 (閲覧日：2019.1.15)
- O'Dowd, R. (2018). From telecollaboration to virtual exchange: state-of-the-art and the role of UNICollaboration in moving forward. *Journal of Virtual Exchange*, 1, 1-23.
- O'Rourke, B. (2007). Models of telecollaboration (1): eTandem. In R. O'Dowd (Ed.). *Online intercultural exchange: An introduction for foreign language teachers* (pp. 41-61). Clevedon: Multilingual Matters.
- Wondershare. Facebook のために動画圧縮する方法. <https://www.wondershare.jp/howtoedit/compress-video-for-facebook.html>(閲覧日：2019.7.15)
- 山内真理 (2002) 日本人学習者の英語音認識における弱点. 『大阪薬科大学教養論叢・ばいであ』26, 93-114.
- 山内真理 (2014). オンライン異文化交流の事例研究. 『千葉商大紀要』51 (2), 261-274.
- 山内真理 (2017). 特集「学習への動機づけと ICT 利用教育」Kahoot! による学生参加の促進—ゲーム要素による学習態度の変容—. 『コンピュータ & エデュケーション』43, 18-23.
- 山内真理 (2018). 動画ベースの異文化交流プロジェクト. 『千葉商大紀要』55 (2), 87-104.
- 八島智子 (2003). 第二言語コミュニケーションと情意要因「言語使用不安」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」についての考察.
- 八島智子 (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部.
- 八島智子 (2019). 『外国語学習とコミュニケーションの心理』関西大学出版部.
- 湯舟英一 (2007). 長期記憶と英語教育 (1) —海馬と記憶の生成, 記憶システムの分類, 手続記憶と第二言語習得理論—. 『東洋大学人間科学総合研究所紀要』7, 147-162.
- 吉島茂・大橋理枝 (他) (訳・編) (2004). 『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社.

(2019.9.20 受稿, 2019.11.22 受理)

〔抄 録〕

現状、「使用経験がない—上達しない—自信がつかない—使用機会を活用できない—上達しない」という膠着状態から抜け出せないでいる日本人の英語学習者は多いと思われる。本稿で報告する、2018年度実施の「動画交換を軸とするクラス間言語文化交流」は、習熟度が低く、外国語不安も高いと想定される学習者が、この膠着状態を抜け出すための英語使用経験を提供すべく、設計された。2018年度の実践の結果、「動画共有+コメント」という形での交流活動に対する参加者の満足度は高く、多くの参加者が有意義かつ肯定的な英語使用経験を積むことができた。技術的な面で実施のハードルが低く、習熟度別クラスも想定していないことから、柔軟に運用できるプロジェクトであるとも考えている。2018年度の実践では、交流活動への積極的な参加をサポートすると期待された5つ要素—①動画の伝達力、②非同期型コミュニケーション、③グループでの動画作成、④二言語使用、⑤日米混合小人数グループ編成—は概ね期待通りに機能したものの、プロジェクトの良さを発揮しきれない結果となった。本稿では、本実践の成果を確認し、活動設計の改良に向けて考えられる課題を洗い出す。